『國民新報』1940年6月23日[[1]](#footnote-1)

[主張]　至誠の祈誓[[2]](#footnote-2)

　六月十九日、をめ、 にいて、一に のためをし、いて ののためのがりはれた。にいても このはじめ 五千し、二千六百年の を、にへたてまつらんことを つたのである。のにいても のがあつた。

　一のの このはこれからき、をうて をぶことであらう。そのとはんであるか。それは 八紘一宇ののである。その一として ががつちりと一となることであり、が のにいて、のに むことであり、アジアが、のより れて、わがをとして、ととを する ことであり、んでは、、の 、、によつて、より、へとにをねつつあるが、のへと すくひげられることである。これが、われわれ一のがにへたてまつらんと つたことである。んたるにしてなひであることか。

　さて、ならざればなし。にしてくをする。もしわれわれのひがりにならないためには、われわれはのとならねばならない。一のつて一のりなく、いなく、そのものにならなければならない。のにてをもつてしらう。なきものにはえない。なきものにがえないのとである。あるものゝはずをかす。なき詣をするやうなは、のおにものおにもたない[。]にたないばかりでなく、のになることだらう。

　ものである。もなくてはならない。、もかねばならない。しかしそれもあつてのことだ。なれこそ、あるがにである。にずるのものはであり、一、をくするのも、である。[、]をするはこれにあらずしてんぞ。なき同になんてあるものでない[、]じてこそし、してこそだ。しかしてはからのみる[、]もてじてこその一もるのだ。

　われわれはのに をしてせねばならない。それは りにするである。このまでの をせねばならない。をるで、われらのなるべきにをつたりや、の をば、こそぎりらなければ ならない。そして二とわがにがくひ、わがより りのがれないやうにはなければ ならない。そして、わがもも そのものになるやうしなければならない。これこそは ののではなからうか。でを つつもりで、わがとの僞にめをささう。

1. 6月23日と30日の合併号。 [↑](#footnote-ref-1)
2. この文章は一部「わかちがき」がなされている。 [↑](#footnote-ref-2)